

[タイトル]

# アメリカのアーキビストと社会運動記録

## “Archival Edge”をめぐる

American Archivists and Social Movements' Records: On and Over the “Archival Edge”

[著者]

平野泉 | Izumi Hirano

[キーワード]

| 社会運動 | アーカイブズ | アメリカ | 収集戦略 | 評価選別 |

social movement / archives / United States of America / collection strategy / appraisal

[要旨]

日本では、戦後社会運動の記録は公文書館等の系統的収集対象になりにくく散逸の危機が指摘されているが、海外では同様の記録が多くのアーカイブズ機関に収集されてきた。そうした内外の条件の違いを明らかにし、日本の今後に生かすための試みの第一歩として、本稿ではアメリカの事例に取り組んだ。主としてアメリカ・アーキビスト協会1974年度大会の会長演説“Archival Edge”を軸に、アメリカ・アーキビスト協会が編集・発行する専門誌 *The American Archivist* 掲載関連論文・記事を検討した結果、アメリカ社会の変動や、大学の大衆化・科目の多様化等さまざまな要因がアメリカのアーキビストたちの活動に与えた影響や、現存するコレクションが抱える問題点等が確認できた。今後はカナダ等条件の異なる国を対象に検討を続けて国際比較を可能とするとともに、日本における社会運動記録保存を考える手がかりとしたい。

In Japan, records of social movements after WWII have rarely been systematically collected by archival institutions, and researchers lament the loss of such records. However, such records are within the mandate of many archival institutions abroad. Why is there this difference in Japan? As the first step to answer this question, this research note looks into what conditions contributed to the survival of similar records in the United States through the examination of related material published in *The American Archivist*, with a primary focus on the seminal presidential address at the Annual Meeting of the Society of American Archivists in 1974 by F. Gerald Ham, “Archival Edge,” and the repercussions it found.

We confirm that many factors, including dynamic social change from the time of the Civil Rights Movements to the Vietnam War, the massification of higher education, and the diversification of curriculum positively affected the collection activities in the United States. However, based on the ensuing discussions, this paper will also suggest that the resulting collections have problems that need to be addressed. By looking further into the practices followed by other countries, such as Canada, the author hopes to make international comparisons and find some clues as to how Japanese archivists can envision a better future for the preservation of records of social movements.

大戦間期のシカゴ。社会福祉・平和運動家であり、後年ノーベル平和賞を受賞するジェーン・アダムズ<sup>[1]</sup>が暖炉で書類を燃やしている。たまたま居あわせたスワースモア大学の理事が、歴史的価値のある資料だから大学図書館で預かろうと提案し、アダムズは記録を同大学に移管し始める。そして彼女が亡くなった1935年、その活動を記念してスワースモア大学平和コレクション(Swarthmore College Peace Collection)が設立される<sup>[2]</sup>。同年、アムステルダムでは国際社会史研究所が正式設立し、ヨーロッパの運動記録を戦火やナチスによる破壊から守るうえで重要な役割を果たすことになる。同研究所の所蔵資料ガイドは、運動記録がしばしば不完全な形でしか残らない理由として、運動当事者が自らの記録を「つまらない場所ふさぎの紙きれ」としか考えていない場合があることを挙げている<sup>[3]</sup>。

「確立された制度外の領域での行動を通して、共通の利益をさらに追求し、または共通の目標を達成する集会的試み」<sup>[4]</sup>としての社会運動(social movement)は、社会的現実の重要な一部である。アーカイブズ<sup>[5]</sup>の目的が「我々の社会が表象するものごとに関する妥当な(reasonable)ドキュメンテーションを将来の世代に残すこと」<sup>[6]</sup>であるなら、社会運動の記録はアーキビストの営みの中にどう位置づけられてきたのだろうか。

日本でも、法政大学大原社会問題研究所などの機関が社会運動の記録保存に携わってきた。しかし同時代史や現代の社会運動の研究者は、1950-60年代以降の公害や開発に関する住民運動や、反核・平和などを訴える市民運動に関するアーカイブズ機関の収蔵資料が「極めて手薄である」<sup>[7]</sup>と批判している。原水爆禁止運動に深く関わった安井郁の資料を整理した小林文人も、「戦後史を担ってきた市民活動や住民活動の側でも、貴重な資料が保存され活用される条件をもつことができず、無惨に姿を消してしまっている悲しむべき現実」<sup>[8]</sup>を嘆いている。その一方で、日本で1960-70年代にかけて活動した「ベトナムに平和を!市民連合」の文書が、アメリカの運動体の収受文書としてスワースモア大学平和コレクションに所蔵され<sup>[9]</sup>、日本における反戦米兵の脱走支援活動に重要な役割を果たしたフランスの運動体“Solidarité”(「連帯」)の記録の一部は国際社会史研究所で公開されている<sup>[10]</sup>。

筆者の目指すところは、日本の社会運動記録保存の現状を考えるための手がかかりとして(1)日本では「無惨に姿を消す」同時代の運動記録が、海外ではアーカイブズ機関に幅広く取り込まれ得たのはいかなる状況下であったのか、(2)海外各国間の共通点や相違点は何か、(3)この2つの問いに答えるにはどうすればよいのか、を明らかにすることである。そのための第一歩として、本稿では、(3)(方法論の問題)については手探りしながらということにはなるが、多くの運動記録を保存・公開してきたアメリカでの議論と実践について、(1)の一事例として検討するこ

[URLは全て2012年9月22日最終確認。The American Archivist誌はAAと略記。]

1 ―― Harvard University Library Open Collections Program, “Women Working, 1800-1930”, Jane Addams (1860-1935) の項目。http://ocp.hul.harvard.edu/www/addams.html

2 ―― Ellen Starr Brinton, ‘The Swarthmore College Peace Collection-A Memorial To Jane Addams’, AA, vol.10, no.1, January 1947, pp.35-36.

3 ―― Elly Koen, “Introduction”, in: Atie van der Horst, Elly Koen (eds.), *Guide to the International Archives and Collections at the IISH, Amsterdam*, Amsterdam: Stichting beheer IISG, 1989, p.XVII.

4 ―― Anthony Giddens, *Sociology, Sixth Edition*. Cambridge: Polity Press, 2009, p.1010.

5 ―― 本稿では、アーカイブズ所蔵機関を指す場合は「アーカイブズ機関」の語を用いる。

6 ―― Richard Cox, “Conclusion: The Archivist and Community”, in: Jeannette A. Bastian and Ben Alexander (eds.), *Community Archives: the Shaping of Memory*. London: Facet Publishing, 2009, p.257.

7 ―― 原山浩介「市民・住民運動資料をめぐる現在の制度的課題」、「1970年代の市民・住民運動が蓄積した資料の整理・活用」の道を探る」刊行委員会「1970年代の市民・住民運動が蓄積した資料の整理・活用」の道を探る ― 資料の持つ代替不可能な価値を活かすために、同委員会、2009年、p.15.

8 ―― 小林文人「安井家資料と沖縄問題」、和光大学人間関係学部岩本陽児研究室「原水禁運動資料のデータベース化の試み ― 安井郁・田鶴子関係資料の整理・保存・活用を通して ― 2006年度和光大学総合文化研究所 模索研究 報告書」、和光大学人間関係学部岩本陽児研究室、2007年、p.47.

9 — Quaker Action Group Records, 1965-1973, Collection No.DG074, Box20. <http://www.swarthmore.edu/library/peace/DG051-099/dg074AQAG.htm>

10 — 国際社会史研究所オンラインカタログ, Solidarité Archives, <http://hdl.handle.net/10622/ARCH01986>

11 — Richard J. Cox, 'Lester J. Cappon and the Relationship of History, Archives, and Scholarship in the Golden Age of Archival Theory', AA, vol.68, Spring/Summer 2005, p.104.

12 — F.Gerald Ham, 'Archival Edge', AA, vol.38, no.1, January 1975, p.5.

としたい。ただし対象地域をアメリカに限定したとしても、あらゆるできごとや議論を検討の対象とすることはできない。そこで本稿では、アメリカ・アーキビスト協会(The Society of American Archivists, 以下「SAA」という。)が編集・発行する専門誌 *The American Archivist* (1938年創刊、以下「AA誌」という。)掲載論文・記事を主な素材とし、1974年SAA年次大会の会長演説“Archival Edge”を軸として、その内容、背景、その後の議論の展開等を中心に検討を試みる。同演説がアメリカにおいて、社会運動記録への注目を高めることに一定の役割を果たしたと考えられるからである。

## 2 — “Archival Edge” 演説とは

1974年10月1日－4日、カナダ・オンタリオ州トロントでSAA第38回年次大会が開催された。「アメリカ文化をドキュメントする(Documenting American Culture)」をテーマに掲げた大会3日目、会長任期を終えるジェラルド・ハムが演説を行った。「過去のSAA会長演説の中で最も重要かつ最も引用されている演説のひとつ」[11]、“Archival Edge”である。(参照の便のため、同一論文の連続引用・参照の際には初出時脚注に書誌情報を示した後本文中に( )でページ数を示す)

私たちがアーキビストにとって最も大切で、知的に最も困難な仕事、それは同時代の人間の経験を表象(represent)する記録を未来に提供できるような情報を、十分な知識に基づいて選別することだ。なのにどうして私たちはこの仕事を、これほど下手くそにやらなければならないのだろうか? [12]

そう問いかけたハムは、アーカイブズ機関の所蔵資料がアメリカ社会の全体を反映したものにはなっていないという批判のいくつかを紹介し、そうした批判をアーキビストが問題視していないことこそが問題だと指摘した(p.7)。記録の保管者(custodian)たるアーキビストの役割は歴史家が選別・収集した資料を保存することだという認識は根強く、当時増加傾向にあった専門アーカイブズ機関設立の契機も多くが歴史家の資料収集活動であるため、収集活動は歴史研究の動向に左右されてしまっているとハムは言う。そのうえで彼は、自らの関心に縛られている歴史研究者にはできない、「書かれる必要がある全ての歴史について心配」することこそ「アーキビストのすべきこと」(p.8)であり、当時の社会に起こっていた「相互に関係する5つの変化」が、より積極的・創造的な役割をアーキビストに負わせるとした。

第1に、社会の構造的変化によりアソシエーションや圧力団体、労働運動体などのアーカイブズの重要性が増したにもかかわらず、そうした方面の収集努力はまだ十分とは言えないとハムは述べている。第2の変化は、記録の量の増加により

全てを残すことは不可能となり、適切な選別の方法論が必要となったこと、それに関連した第3の変化が、コミュニケーション媒体としての電話の重要性が増したことによる文字記録の質の低下である。そのため残された記録には少なからぬ欠損があり、アーキビスト自身がオーラル・ヒストリーなどで欠損を埋める努力をする必要があるとハムは言う。第4の変化が、作成と同時に失われる類の、アーカイブズとしてまともに残りにくい記録(instant archives)の出現である。その例としてハムは1960年代の公民権運動やベトナム反戦運動の記録を挙げ、早期から当事者にコンタクトを取ることなしにはそうした記録は残らなかっただろうと述べている。そして第5の変化が技術革新であり、電子記録の脆弱性がすでに指摘されている(pp.8-10)。

これらの変化が、アーカイブズ機関に所蔵されるべき資料の範囲を拡大し、アーキビストに対し過去に経験のない選択を迫っているとしたうえで、ハムは専門アーカイブズ機関の設立や、限られた資源を活かすための機関を越えた連携等をそうした状況への積極的応答として挙げている(pp.10-11)。古い習慣や態度にこだわらず、より広い視野、より確かな方法論、そしてより緊密な協力により、アメリカ社会の確かな表象を残そうと訴えたこの演説の終盤で、ハムはアーキビストとアーカイブズの存在意義を次のように表現した。

彼(アーキビスト)は、研究コミュニティにとってのルネサンス的教養人にならなければならない……(中略)……もしアーキビストが受け身で、情報を持たず、何がアーカイブズ記録となるべきかについて狭い見しか持たずにいたら、彼が収集するコレクションは決して人類に鏡を差し出すようなものにはならないだろう。また、もし我々がそうした鏡を差し出そうとするのでなかったら、人々が自分の暮らす世界を理解する手助けをしようにするのでなかったら、そしてアーカイブズがつまるところそのためにあるのでなかったら、我々のしていることの何がそれほど重要なのか、私にはわからない(p.13)

そして演説を締めくくるのが、タイトルの由来となったカート・ヴォネガットの小説『プレイヤー・ピアノ』からの引用句、“Out on the edge you see all kinds of things you can't see from the center....Big, undreamed-of things – the people on the edge see them first.”(「縁<sup>ふち</sup>にいと、まんなかでは見えないいろんなものが見える。夢にも思わないようなでっかいもの——縁にいる人間が、それを最初に見るのさ」[13])である。演説では触れられていないが、この小説の舞台は機械とパンチカードに人間の運命が完全に支配され、やりがいのある仕事をし、人間らしい生活を送るのは管理者と技術者のみという近未来の社会だった。そして上記の引用句を口にしたのは、稀有な才能に恵まれてエリートコースを歩みながら、そこから離脱することを選んだエド・フィナティーである。生産性と効率を至上の価値とする世界で「正常」であることを拒否し、まんなかよりも「縁」に立つことを選んだエドの言葉を用い、ハムはアーキビスト自身が現代社会の抱える問題の一部であることを自覚

13——原文は同上、p.13、日本語訳はカート・ヴォネガット・ジュニア著、浅倉久志訳『プレイヤー・ピアノ』、早川書房、2005年、p.150。



14 — James M. O'Toole and Richard J. Cox, *Understanding Archives and Manuscripts*. Chicago: The Society of American Archivists, 2006, p.71.

15 — Fredric M. Miller, 'Social History and Archival Practice', *AA*, vol.44, no.2, Spring 1981, pp.114-115や、桐谷正信『アメリカにおける多文化的歴史カリキュラム』東信堂、2012年、p.8等。

16 — Herbert Finch (Report), 'News Notes: Manuscript Collections', *AA*, vol. 31, no.1, January 1968, pp.121-122.

17 — Maynard J. Brichford, 'University Archives: Relationships With Faculty', *AA*, vol.34, no.2, April 1971, p.175や、Patricia J. Gumpert, Maria Iannozzi, Susan Shaman, and Robert Zemsky, 'Trends in United States Higher Education from Massification to Post Massification', National Center for Postsecondary Improvement, School of Education, Stanford University, 1997. [http://www.stanford.edu/group/ncpi/documents/pdfs/1-04\\_massification.pdf](http://www.stanford.edu/group/ncpi/documents/pdfs/1-04_massification.pdf)等。

18 — Maynard J. Brichford, 'Academic Archives: Überlieferungsbildung', *AA*, vol.43, no.4, Fall 1980, p.455.

するよう求めた。最初の問いかけからも明らかとなり、この演説の主題は社会を広くドキュメントするための収集戦略であった。しかし時代、状況、語られた場面、そして「縁」のメタファーが、この演説にそれを超えた意味づけをもたらした。3,4章ではその点につき検討を加えてみることにしたい。

### 3 — “Archival Edge”の時代：「まんなか」と「縁」

#### 3-1：アメリカのアーカイブズ状況

民間の努力による歴史資料収集が公文書館設立に先行したアメリカでは、企業や労働組合などの民間団体の資料は各地の歴史協会や図書館の専門コレクション等の、いわゆる「マニュスクリプト・コレクション」が伝統的に収集してきた。そもそもアーカイブズ機関が、公文書や著名人の私文書のみならず多様な組織や無名の人々の記録を保存することを求められるようになったのは、歴史学の関心が国家や外交、政治家や著名人の活動が創る歴史から、無名の人々の思想や活動が織りなす社会史へと移行したことに影響を受けている[14]。アメリカでは、フランスのアナール派の影響を受けながらも「新しい社会史」が独自の発展を遂げ、1950-60年代の公民権運動と連動し、アメリカ社会のマイノリティを研究対象として70年代後半に成熟期を迎えていた[15]。

そうした研究の対象となる資料の収集活動が活発化したのもこの時代だったようだ。AA誌では1968年1月号から、マニュスクリプト・コレクションに関する短報(News Notes欄の一部として)の掲載が始まった。これは全米で急増中の労働、都市問題、地域、人種、女性などをテーマとする専門アーカイブズ機関の情報交換を目的としたもので[16]、機関設立や人事に関する情報のほか、全米各地の機関のアーカイブズ受け入れに関する情報が1980年まで毎号多数掲載されている。

また、そうした専門アーカイブズ機関の収集活動には、1950年からの国民の中流化を背景とする高等教育機関の増加、そして60-70年代にピークに達した大学の大衆化も影響を与えていた[17]。急増する大学・大学院では研究・教育の内容が多様化し、新しい専門分野に優秀な教員・学生を呼び込むとともに、彼らの研究・教育活動を支援するための学術資源が必要とされた。その結果、大学図書館の専門コレクションや大学内のアーカイブズ機関が、多様な資料を精力的に収集することになったのである[18]。

#### 3-2：専門職集団としてのSAA

一方、前節で示した専門アーカイブズ機関の増加は、大学に勤務するアーキビ

ストを増加させ、それによりSAAの会員構成に変化が生じ、公文書館職員から大学等研究機関勤務のアーキビストへと比重が移動した[19]。またSAA設立(1936年)前後にアーキビストとなって専門職草創期を支えた世代が現役を退く時期を迎え、世代交代も進みつつあった[20]。しかもこの時期SAAに加わった若手の多くは、戦後の繁栄期に中流家庭の伝統的価値観の中で育てられながら、50年代には公民権運動、60年代には学生の抗議行動とベトナム戦争を経験し、そうした価値観を疑うことになった世代に属していた。彼らは「ナパーム、キャンパスでの暴動、対人兵器の記憶」や生き残ったことへの罪悪感を共有し、親や教師の示す道を歩めば幸福に生きられると信じられなくなった若者たちだったのである[21]。このように専門職内部でも、「まんなか」(例えばベテラン、官僚機構の中で組織文書を扱うアーキビスト)と「縁」(例えば若手、リベラルな研究・教育環境で収集資料を扱うアーキビスト)との関係は変わりつつあった。その一方でアーキビストの社会的認知は依然として低く、専門職全体としては社会の「縁」に位置していた[22]。

こうした動向をとらえたSAA会長のハーマン・カーンは1970年8月、1970年代のための委員会(Committee for the 1970's)を設置する。この委員会はフィリップ・P・メイソンを委員長として1972年まで活動し、SAAの現状と会員ニーズを分析し、SAAがより民主的、応答的かつ重要な組織となるための提言を報告書にまとめた[23]。

1970年度大会では、公民権運動やベトナム反戦運動に積極的に関与した歴史家のハワード・ジンが報告を行う。ジンは、専門性は強力な社会的統制(social control)の一形式[24]であり、アーキビストの中立性はまやかし(fake)だと言い放つ(p.123)。アメリカにおいて保存される記録資料とその利用可能性は「多くの場合富と権力の配分により決定」(p.123)されており、アーキビストは業界で主流とされる考え方に受動的に従い、「中立的」に仕事をすることで、「重要人物、権力者、軍事・政治・経済界のリーダーたちを賛美し、社会に生きるふつうの人々の生活を暗がり」に放置」する、アーカイブズの偏見(archival bias)の維持に加担してしまうことになる。だからこそ「我々が自らの受動性から自らを引き離し、我々の専門職としての生き方を自らの人間性と統合すること」が必要であるとジンは訴えた。そして、「ふつうの人々の生活や欲求や必要に関する、全く新しい文書資料の世界を構築」すべく努力し、「真の民主主義」の実現のために役割を果たそうと呼びかけたのである(pp.129-130)。

こうしたジンの言葉に動かされた十数名のアーキビストが、1971年大会を前にArchivists for Change(ACT)を結成する。彼らは「SAAの民主化、既存の路線に代わる立場の提示、新しいプログラムの立ち上げ、そして私たちの仕事を、それぞれのコミュニティで実現しようとしている社会変革につなげることを目指し、1970年代のための委員会の活動を積極的に支援した[25]。また大会では、都市の歴史を専門とするサム・バス・ワーナーが、「我々の仕事はあら

19 — Frank B. Evans and Robert M. Warner, 'Americian Archivists and Their Society: A Composite View', *AA*, vol.34, no.2, April 1971, p.162掲載のTable 1によれば、1970年のSAA会員アンケート回答者423名のうち大学勤務141名、連邦+州政府149名ではほぼ均衡。

20 — Philip P. Mason, 'Archives in the Seventies: Promises and Fulfillment', *AA*, vol.44, no.3, Summer 1981, p.199.

21 — Andrea Hinding, 'The Third Generation: War, Choice and Chance', in: Herman Kahn, Frank B. Evans, and Andrea Hinding, 'Documenting American Cultures Through Three Generations: Change and Continuity', *AA*, vol.38, no.2, April 1975, pp.156-157.

22 — 例えば前掲注20, Mason (1981), p.201およびp.205.

23 — Philip P. Mason, 'The Society of American Archivists in the Seventies: Report of the Committee for the 1970's', *AA*, vol.35, no.2, (April 1972), p.193.

24 — Howard Zinn, 'Secrecy, Archives, and the Public Interest', in: Howard Zinn, *Howard Zinn on History*. New York: Seven Stories Press, 2011, pp.117.

25 — PDF化され、Progressive Archivistのサイトに掲載されている"Archivists for Change" (<http://www.librt.org/progarchs/pdf/ACT.pdf>)によれば、最初の会合に出席したのは16名だったという。

26 — Sam Bass Warner, 'The Shame of the Cities: Public Records of the Metropolis', *Midwestern Archivist*, vol.2, no.2, 1977, p.29. <http://digital.library.wisc.edu/1793/45940>

27 — F. Gerald Ham, 'Report of the Secretary, 1970-71', *AA*, vol.35, no.1, January 1972, p.111

28 — 前掲注23, Mason(1972), p.205.

29 — Lester J. Cappon, 'The Archivist as Collector', *AA*, vol.39, no.4, October 1976, p.430.

30 — David J. Delgado, 'The 34th Annual Meeting of the Society of American Archivists', *AA*, vol.24, no.1, January 1971, pp.43-45.

31 — Patrick M. Quinn, 'Archivists and Historians: The Times They Are A-Changin'', *Midwestern Archivist*, vol.II, no.2, 1977, p.12. <http://digital.library.wisc.edu/1793/44116>

32 — 前掲注21, Kahn et al.(1975), Editor's Note, p.147.

ゆる人が自分の役に立つような知的な歴史をつくる手助けをすることであり、人間として可能な限りにおいて、アメリカ史における古典的な主題を放棄し、我々自身の時代の主たる問題に対する歴史的説明の探求に向かわなければならぬ」[26]と語った。

現代社会とそこに生きる人々の思いと行動をドキュメントするために、そしてよりよい社会を創るためにアーキビストが積極的な役割を果たすこと、つまりアーキビスト自身が activist=運動家になることを2人の歴史家がアーキビストに訴えたこの時期、ハムはSAAの事務局長を務めており(1968年-1971年)、上記1970年代のための委員会の職権上のメンバーでもあった。当時実施した会員アンケートの結果を報告するにあたり、会員が現代の社会問題に全く無関心であることを嘆いていた[27]ハムは1974年、一アーキビストとしてではなく、SAA会長としての立場で2人の歴史家の問いかけに答えた。しかも年次大会恒例の会長演説という大舞台で、専門職の「まんなか」に安住することをやめ、その「縁」に立とうと同僚たちに語りかけたのである。こうしたハムの態度は、人種差別や雇用の平等といった同時代の諸問題に対して、それがどれほどの議論を巻き起こそうとも、公式な態度表明を行う「倫理的責任」をSAAは負う、とした70年代のための委員会報告書の文言[28]とも呼応していた。

#### 4 — 「挑発的なメタファー (a provocative metaphor)」[29]

##### 4-1: 共感と懸念

参加登録者が511名に達した1970年度大会で、ジン報告を含むセッション「アーキビストとニュー・レフト」は300人を超える参加者を集めた。ジンの報告後、ウェイン州立大学のフィリップ・P・メイソンが、「多くのプログラムや機関が、抗議運動や改革運動の指導者やグループのドキュメンテーションを積極的に集めている」ことを指摘し、ウィスコンシン州歴史協会のパトリック・M・クインは学生運動家としての経験からジンの見解を支持した[30]。ジンの主張は「比較的少数の、主として若手のアーキビストには熱狂的に受け入れられ、彼らがその後、アーカイブズ専門職に対するジンの批判の正しさを同僚たちに認めさせるよう努めた」[31]とクインは後年、述べている。そして4年後、ハムの演説は満場の喝采を浴びた。

一方で、彼らの発言に対する懸念を表明した者たちもいた。例えば1974年大会2日目の全体会議で、1930年代、50年代、60年代にアーキビストとなった3世代から1名ずつが、「社会と文化における人間性をドキュメントするためのプロセスと可能性」について報告した際[32]、第2世代を代表して演台に立ったフラン

ク・B・エヴァンズがその一人である。彼はジンの言う運動家=アーキビストが母組織の記録には無関心であったり、収集したアーカイブズをマニュスクリプトのように扱ってしまっている場合があると指摘し、ヒラリー・ジェンキンソンを引用しつつ、運動家になることで専門職が伝統的に保ってきた中立の立場を捨てることになってもよいのかという疑問を投げかけた[33]。またSAA創設メンバーでもあるレスター・J・カッポンは1976年の論文で、ハムの“Archival Edge”は「挑発的なメタファー」ではあるが、それは「いったいどこにあるのか」と切り返した[34]。そしてハムの主張は目新しいものではなく、多くのアーキビストが考え、取り組んできたことであり、ある種の記録に対しては思い切った選別が必要である一方で、ある種の資料が稀少なものになってしまうのは、時代を問わずアーキビストが直面するジレンマであると指摘したうえで、積極的収集努力に伴うアーキビストの主観的判断が歴史家のそれに優先してしまうことへの危惧を表明した(p.430)。この2人は明らかに記録保管者としての中立性、業務の副産物として生まれる記録の無垢(innocence)に不変の価値を見るジェンキンソンの信念を共有している。そうした彼らにしてみれば、ジンやハムの発言は自らがこれまで築いてきた理論と実務の有効性を否定するものとも聞こえかねない[35]ことを考えると、彼らの反応も理解できる。ただ、この2名がともに50年代までにアーキビストとなったベテラン世代に属しているからといって、ジンやハムの議論に対する温度差を世代間の相違に帰することもまた、過剰な単純化として避けられるべきであろう。

#### 4-2:「どうしてこれほど下手くそに」

3-1で触れた通り、AA誌News Notesのマニュスクリプト・コレクション欄には、12年間にわたり全米の様々な機関にどのような資料が受け入れられたかが報じられている。日本でもよく知られている運動体のものも多く、例えば1970年1月号(vol.33, no.1)は、テンプル大学都市アーカイブズセンターが開館し、フィラデルフィア自由人権協会や、全米黒人地位向上協会(NAACP)フィラデルフィア支部などのアーカイブズを公開したと伝えている(p.147)。1977年1月号(vol.40, no.1)には、ニューヨーク大学のタミメント図書館がアメリカ左翼のオーラル・ヒストリー・プロジェクトに着手し(p.131)、プリンストン大学がコモン・コースにより「同団体のアーカイブズ収蔵機関に選ばれた」ことなどが報じられており(p.132)、運動体が自らの記録を大学内の機関へ継続的に移管することは、すでに通常の実務であることが伺える。また1978年1月号(vol.41, no.1)は、消費者連合(Consumers Union)の公式リポトリである消費者運動研究センターが全米人文科学基金(NEH)の助成金を得たと伝えている(p.86)。どんなアーカイブズ機関でも支援を受けられる連邦レベルの助成金プログラム(NEHのほか、国立歴史的出版物・記録委員会(NHPRC)なども)が、運動記録保存の営みをも下支えていたのだ[36]。

33 — Frank B. Evans, 'The Second Generation: The Teachers and the Taught', 同上, pp.152-153.

34 — 前掲注29, Cappon(1976), p.431.

35 — 前掲注11, Cox(2005), p.105.

36 — 他にも1977年にはYWCAの理事会が、アーカイブズの編成・記述のための助成をNEHから('News Notes', AA, vol.40, no.2, April 1977, p.267)、ミネソタ大学移民史研究センターが、International Institute 運動資料の収集・保存活動に対する助成をNHPRCから受けている('News Notes', AA, vol.40, no.4, October 1977, p.486)。



37 — Eva S. Moseley, 'Sources for the "New Women's History"', *AA*, vol.43, no.2, Spring 1980, p.183.

38 — Linda J. Henry, 'Collecting Policies of Special-Subject Repositories', *AA*, vol.43, no.1, Winter 1980, p.59.

39 — 前掲注15, Miller(1981), p.117.

40 — Dominique Daniel, 'Documenting the Immigrant and Ethnic Experience in American Archives', *AA*, vol.73, Spring/Summer 2010, p.91.

41 — Rabia Gibbs, 'The Heart of the Matter: The Development of History of African American Archives', *AA*, vol.75, Spring/Summer 2012, p.200.

もちろんこうした全てがジンやハムの演説で始まったわけではないが、70年代以降の社会運動やマイノリティの記録に関する議論で頻繁に参照されるのは彼らの演説である。よく見られるのは(皮肉なことに)彼らの議論が有効であり続けているとの指摘だ。例えば女性運動に関し、運動に参加する余裕がある中流以上の女性と著名な運動に収集対象が限られていること[37]、ジェンダーやエスニシティに特化した専門アーカイブズ機関でも、所蔵資料が著名人のものに偏っていること[38]、組織化された活動への注目自体が、ふつうの人の歴史を研究する社会史家にとってはバイアスであること[39]、などの指摘である。そうした指摘が正しいとすれば、この間の努力はたんにアーキビストの目線で「縁」を設定し直したに過ぎなかったことになるだろう。

現在もハムの議論は基本的に有効とされている。しかし例えばドミニク・ダニエルはエスニック・アーカイブズに関する論文[40]で、記録が社会の事象を映し出すこと(representativeness)は実現不可能であり(p.91)、コミュニティが自らを理解する様式こそが重要で(p.98)、エスニシティを収集対象たる「主題」ではなく記録の「出所」ととらえるべきと論じた(p.95)。またラビア・ギブスは黒人解放運動のドキュメンテーションに関する論文[41]で、マイノリティ集団の内部にも圧殺された声、消された記憶があることを指摘(p.200)、「多様なグループ内部の多様性をよく見極め、対象とするコミュニティの内部に存在するあらゆる視点を織り込めるよう、私たちの目標を設定し直さなければならない」(p.204)と主張し、「縁」と「まんなか」は記録作成者たちの内部にも存在することを示した。これらの論考から見えてくるのは、“Archival Edge”の問題提起から約40年たった今、ハムの議論を下敷きとしつつも、ある集団の記録をアーキビストの収集活動の単なる客体と見るのとは異なる、より参加的かつ精緻な議論が始まっているということである。アーキビストはまだまだ「下手くそ」な仕事をしているのであり、それを修正する努力もまた、続いているのだ。

## 5 — おわりに

本稿では、AA誌掲載論文・記事を主たる題材とし、1974年の“Archival Edge”演説を検討の軸としたため、時代としては1970年代以降の議論に重点が置かれるようになった。それにより設定される二重の限界のなかで、当面の結論として言えることは以下の通りである。

まず、アメリカで現代の社会運動記録が一定量残された背景には、70年代初頭アメリカの社会的状況(例えば公民権運動やベトナム戦争などがもたらした大きな社会変動、高等教育機関の急増と科目の多様化によるアーカイブズ機関の増加と収集対象の変化)に加え、アーキビスト集団の世代交代やメンバー構成の変化、政治や社会に

対する意識の変化などの要因が複雑に絡み合う状況があったことである。アメリカの同僚たちはそうしたなかで収集範囲の「縁」を内部から押し広げ、多様な記録を多様な機関に取り込んできたが、それとともに新しい要求や課題にも直面することになった。

また、アメリカ社会やSAA自体が変化を遂げていた時代のSAA会長として、ハムはアーキビストが専門職として進むべき方向を明示する必要があった。多くの問題を抱える社会に生きる人々の役に立つ存在になろうというメッセージと、社会問題の内部に身を置き、既成概念を疑いつつ「縁に立つ」アーキビストのイメージが、同時代のアーキビストたちの政治意識や社会状況に対する危機感にアピールしたのである[42]。私たちは印刷された“Archival Edge”を読むことしかできないが、それが演説として肉体と声を通じて伝えられ、聴衆を挑発したということ忘れてはならないだろう。少なくとも一部のアーキビストたちは、ジンやハムの問いかけに答え、「『規範』への抵抗」(“rebellion against the *norm*”)[43]を試みた。ここからは筆者の推測になるが、社会運動の記録を収集対象としながら、その運動が対象とする社会問題に無関心であり続けることは難しい。運動記録に向き合うアメリカのアーキビストたちは、社会の中で運動する人々の姿を自らに差し出された鏡とし、彼ら自身も「社会をドキュメントする」という運動をしていたのではないか。そしてアメリカのアーカイブズ機関に収蔵された社会運動記録は彼らの運動の成果でもあり、その蓄積が現代のより精緻な考察を可能にしているのではないだろうか。

AA誌に見る、アメリカの同僚たちが経験から引き出した数々の論点——例えば専門性と権力、社会をドキュメントする努力に伴うジレンマ、そして記録作成者たちの内部にも存在する記憶と忘却の政治など——を参照することは、日本のアーキビストが日本の状況に合った運動記録保存のあり方につき、より実のある議論をするための一助となるはずだ。そして、今こそそうした議論がなされる必要がある。アーカイブズが人々のものであるなら、『無名』の人々がこれからも携わるであろう数々の『運動』『活動』の貴重な前例、学ぶべき経験の宝庫として大切な意味を持つ[44]運動記録は、その必須の一部をなすはずだからである。

末筆になるが、今回の検討を通して、各国の主要なアーカイブズ専門誌のみを検討対象としても(その限界を意識している限りにおいて)、社会運動記録をめぐる状況、取り組み、そして議論の輪郭をつかむことは可能なのではないかと思うに至った。今後トータル・アーカイブズのカナダや、アーカイブズと社会運動がともに長い伝統を有するヨーロッパ各国などを対象として同様の検討を試みることで、研究の方法論についてさらに模索するとともに、日本での議論の一助となるような論点や知見を抽出し、日本も含めた何らかの国際比較を可能とするための努力を続けたい。

42——Brien Brothman, 'The Society of American Archivists at Seventy-Five: Contexts of Continuity and Crisis, A Personal Reflection', *AA*, vol.74, Fall/Winter 2011, pp.420-423 は、この流れが「社会正義実現の道具としてのアーカイブズ」という議論につながると指摘している。

43——前掲注24, Zinn(2011), p.122. ここでは*norm*に「規範」と単純な訳語をあてたが、前後を総合的に解釈すると「一般にそれが普通とされている典型的な考えややり方」といった意味であり、それに唯々諸々と従ってしまうことをジンは批判していると考ええる。

44——道場親信「市民・住民運動資料論の展望と課題」、前掲注7、「1970年代の…」, p.12.